

第1回 学校関係者評価委員会

1 実施日 平成29年9月1日 (金) 午後4時～5時30分

2 会場 校長室

3 参加者 学校関係者評価委員 森本 一(教育振興会会長) 中村 博明(教育振興会副会長)
秋山 幸一(教育振興会副会長) 志村 勇(教育関係有識者)
秋山 弘仁(百々育成会会長) 市川 孝嗣(主任児童委員)
清水 一将(保護者代表・PTA会長 学校関係者評価委員長)
中澤 智子(保護者代表・PTA副会長)
学校側 築野 一彦(校長) 本田 司(教頭)
田原 和仁(教務主任) 依田千恵子(生徒指導主任)

4 学校側から提案された内容

(1) 教職員自己評価(教務主任) (2) 児童アンケート(生徒指導主任) (3) 保護者アンケート(教頭) についての解説や考察, 具体的な学校の様子を説明した。

5 協議された主な内容

学校側からの説明を受け, 学校関係者評価委員長が座長を務め, 座談会を行った。

※○……委員からの意見・感想 ☆……学校の考え

(1) 学習について

○学習塾等にどれくらい通っているかを把握することで, 家庭での学習に対する意識について分かると思うが, 本校の状況はどうか。また, 本校の学力及びその取組についてはどうか。

☆秋田県では, 親が子どもの頃から, 家庭学習によく取り組んでいた。山梨県教育委員会が家庭学習を勧める冊子等を作成し, それに基づき本校においても取り組んでいる。毎月8日にメールを配信して, 家庭学習が定着するように努めている。山梨県の児童生徒は, 質問紙において, 学習等に対する肯定的回答が全国平均を上回り, 家庭における意識の高さが伺える。

※学校側から, 全国学力学習状況調査(6年生)と山梨県学力把握調査(3・5年生)について, 本校の状況を説明した。

(2) 生活について

○昨年度の同時期に比べて, 児童アンケートの否定的な回答が増えているが, 児童の実態は具体的にはどういう状況にあるのか。

☆昨年度は, 1年生が回答していなかったが, 今年度は1年生を含めてアンケートを取るようにした。1年生が比較的厳しめな回答傾向があったことによって, 数値的に低めに現れたのではないかと分析している。児童の実態としては, 昨年度と同様に肯定的な様子であり, 差異は感じられない。

○不登校やいじめについては, その子の将来を左右することになり兼ねないので, 先生の関わり方が重要であり, アンケート以外にもアンテナを高くして実態を把握し, 2学期以降の指導

をお願いしたい。

☆今後も、児童の実態把握に努め、適切な対等を心がけるようにしていく。低学年が訴えるいじめと高学年が訴えるいじめとでは背景にある状況が違うことがあり、学校だけの指導では、解決しないこともあるので、家庭等と連携して対応していきたい。

※学校側から、いじめ・不登校について、本校の状況を説明した。

○携帯電話等の所有について、初めは安否確認のため保護者が子どもに持たせるケースが多いようであるが、その目的を逸して、ゲームなどの使用になってしまっているのではないか。携帯電話等に関わるトラブルの状況はどうか。

☆携帯電話等に関わるトラブルは、ここ3年間は報告がない。携帯電話の所有に関わって、学校においてもルールやマナー等の教育は行っているが、家庭においても、購入と同時にルールを含めて教育を十分行っていたら、トラブルのないように連携していきたい。

○学校とスポーツ少年団等の指導者との考え方や指導に行き違いが生じる場合がある。例えば、勝利至上主義的な指導では、学校での教育的指導とは相反するところもあるので、スポ少の指導者との打合せを持つと良いと思う。スポーツを通して、その精神やマナーを身に付けることは重要である。とりわけ、挨拶をきちんとするということが最も大切であると感じる。

☆体育協会では、そういった指導者との打合せをしている。学校では、個別にスポ少の指導者と話をして、コミュニケーションを取るようにしている。大会等で良い成績を収めた際には、表彰を行ってその頑張りを称賛し、学校生活においてもその功績を生かしていきけるように指導している。

(3) 安全・安心について

○いろいろな災害が考えられる中で、安全に過ごすために、避難訓練等を行っていくことが大切である。例えば、抜き打ち的に実施することも必要であると思う。

☆画一的な避難訓練を実施するのではなく、想定を変えながら避難訓練を行っていくようにしている。命を守ることを第一に実践的な力が身に付くように指導していく。

(4) その他について

○小笠原流礼法の授業を行っているが、こういうことに集中して取り組むことは、大変良いことだと思う。このような学校としてのキャッチフレーズ（特色）があるというのは強みになるので、これからも力を入れていってほしいと思う。

○学校教育は、これらの評価の内容が全てではなく、もっと深いところにあるので、常に高みを目指して努力していくように、先生方には頑張ってもらいたい。

○新しいことを行ったり取り入れたりするならば、今までやってきたことを止めるということも必要である。スクラップアンドビルドという考え方を取り入れていかなければいけない。やることがどんどん増えていくことで、余裕がなくなり拙速な教育活動になってしまえば、教育効果は上がらないので気をつけてほしい。

6 全体評価

全体傾向を把握するため、[A：そう思う][B：ほぼそう思う]評価を肯定的評価とし、それらの合計が80%を超えている場合は『満足できる状況』、[C：あまりそう思わない][D：そう思わない]評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は『改善の余地がある』と判断している。

(1) 教職員自己評価について

36問中35問において、肯定的評価80%を超えている状況から、満足できる状況にあると考

えられる。改善の余地があると判断される内容は、「地域の人材や文化財・自然環境などを、積極的に教育活動に取り入れるよう努力している。」である。特にこのことは、教育課程の内容であるので、しっかり位置づけるようにしていきたい。

(2) 児童アンケート評価について

11問中8問において、肯定的評価80%を超えている。また、残りの3問中においても、2問は分からないと回答した児童を考慮すると、肯定的評価80%を超えていると捉えることができ、満足できる状況と考えられる。このようなことから改善の余地があると判断される内容は1問で、「自分で考えたことを、進んで発表している。」である。校内研究会で指導法の研究を進め、主体的に学習活動への取り組み、発表などを通して、友だちと関わり合いながら学び、高めあう子どもを育てていきたい。

(3) 保護者アンケート評価について

20問中19問において、肯定的評価80%を超えている。満足できる状況と捉えることができる。改善の余地があると判断される内容は、「機会があれば、ボランティアとして教育活動を支援してもよい。」である。仕事が忙しくて、ボランティアをしてもらえないという実態があると考えられるが、チーム学校として、保護者や地域の方に協力していただく中で、子どもを育成していくことが重要であるので、保護者の方には、理解をしていただくように努めていく。

(4) まとめ

各評価について、高い水準で肯定的に回答されていることは、本校の教育活動が安定して行われていると考えることができる。改善の余地があるとされる項目については、地道に継続して取り組んでいく。

7 今後の課題として意識されたこと

- (1) 学校は、保護者や子どもに対して真摯に対応しているが、一人一人の子どもの実態把握に努めて、迅速に対応していくことが大事である。
- (2) 「学校が楽しい」に対して、否定的な回答が16.8%であることから、そういう思いを持つ児童に寄り添いながら、状況の改善に努力をしていく。
- (3) 保護者にいかに学校教育に対して関心を持ってもらうかが、非常に大切である。学校として、保護者が関心を持つような取組を考えるようにしていく。

8 特記事項

特になし

記載責任者

学校関係者評価委員会委員長（PTA会長） 清水 一将